RILAS 研究部門「イメージ文化史」主催講演会　報告書

2017.9.27

フェミニズムの時代：カルラ・ロンツィを読む

Le temps du féminisme : une lecture de Carla Lonzi

主催：早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「イメージ文化史」
共催：早稲田大学文化構想学部表象・メディア論系
　　日本学術振興会科研費（若手研究 B：16K16727　代表：松井裕美）

日時：2017 年 9 月 27 日（水）18:00-20:00
場所：早稲田大学戸山キャンパス 32 号館 128 教室

講演者：ジョヴァンナ・ザッペリ（トゥール大学教授）
司会：橋本一径（早稲田大学教授）
コメンテーター：西谷修（立教大学特任教授）

早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「イメージ文化史」では、トゥール大学のジョヴァンナ・ザッペリ教授をお迎えし、「フェミニズムの時代：カルラ・ロンツィを読む」というテーマでご講演いただいた。

カルラ・ロンツィ（Carla Lonzi, 1931-1982）は、イタリアの美術批評家であり、またフェミニスト、作家、詩人としても活躍した人物である。特にイタリアのフェミニズム・ゼロ年と言われる 1970 年代を境に、ロンツィはフェミニストとしての立場を強めていくが、そのきっかけになった象徴的な作品として、ザッペリ氏は主に *Autoritratto*（『自画像』）と *Sputiamo su Hegel*（『ヘーゲルに唾を吐こう』）の２作品を取り上げ、その分析を報告された。

Autoritratto は、芸術家 14 名の会話をテープレコーダーで録音した記録である。しかし、個々の会話の連続を断ち切り、解体した上で、ロンツィ自身の文章とともに改めて組み立てるモンタージュ的手法を用いて構成されている。機械と身体（録音という近代の技術と聞いて書きとるという身体性）、再構築される過去と現在、音と文字など、様々な対比を提示しながら、ロンツィの挑戦を分析された。

また、*Sputiamo su Hegel* では、ロンツィが女性を sujet imprévu（予想できない主体）ととらえ、将来を予見できない存在として、フェミニズムの時間性と関連させているこ

とを大きく取り上げられた。また、このような女性の sujet imprévu や absence（不在）にも力を見出し、抑圧の事実さえ逆手にとっていこうとするロンツィの姿勢を考察された。

講演後、コメンテーターの西谷修氏から講演内容についてのまとめと質問があったのち、会場からの質疑応答を経て、閉幕した。

（記録：常田槙子）